



**Data**

監督・脚本・撮影: 河瀬直美  
原作: 辻村深月『朝が来る』(文春文庫刊)  
出演: 永作博美/井浦新/蒔田彩珠  
/浅田美代子/佐藤令旺/  
田中偉登/中島ひろ子/平  
原テツ/駒井蓮/利重剛/  
山下リオ

## 👁️👁️ みどころ

夫が無精子症で子供が望めないなら、特別養子縁組が！それを知った夫妻は朝斗クンを育てて今や6年。それなのに、突然「私の子供を返してください」の電話が。そんなバカな！

他方、子供が子供を産んでどうするの！と母親から言われる中で出産する女子中学生。その友人で、父親不明のまま出産する元フーズク嬢。そんな物語が進むと、バカ女のバカさ加減に、いい加減うんざり。

河瀬直美監督直々のカメラワークは美しいが、肝心の脚本がこれでは、映画祭での受賞は、とてもとても・・・。



### ■□■産みの母 vs 育ての母。このテーマは名作揃いだが・・・■□■

産みの母 vs 育ての母。その対立を、冒頭の未成年者略取誘拐罪の成否と言う観点から描いた傑作が、成島出監督の『八日目の蟬』(11年) (『シネマ26』195頁) だった。その冒頭、赤ん坊の誘拐犯として被告人席に座っていたのが、4年間の逃避行に及んだ永作博美演じるヒロイン・野々宮希和子で、同作では井上真央 vs 永作博美の美女対決(?) が興味深かった。産みの母親 vs 流れ着いたボートの中の赤ん坊を育てる灯台守夫婦の葛藤を描いた『光をくれた人』(16年) (『シネマ40』239頁) も名作だった。他方、特別養子縁組の法的問題点に鋭く切り込んだ名作が『夕陽のあと』(19年) (『シネマ46』346頁)。同作では、貫地谷しほり演じる産みの母と、「島の人はみーんなお母さん」と教えながら7歳の子を育てている育ての母との対決が、興味深く描かれていた。

しかして、本作も特別養子縁組をテーマにした映画で、電話口で「私の子供を返してください。」と訴えるシークエンスをアピールした予告編が印象的だった。そんな本作にも永作博美が登場するが、本作でも彼女は朝斗クンの育ての母だ。すると、もう一方のヒロイ

ンたる産みの母は・・・？

## ■□■夫婦の物語はバッチリ。しかし中3のひかりの物語は？■□■

本作はまず、無精子症であることが判明した夫・栗原清和（井浦新）と、妻・栗原佐都子（永作博美）夫妻が、一度は諦めながらも、特別養子縁組のことを知り、浅見静恵（浅田美代子）が広島県の似島という小さな島で営む NPO 法人「ベビーバトン」で生まれたばかりの男の子と特別子縁組を結ぶストーリーが描かれる。その描き方は実に丁寧、そしてまた、河瀬監督自らのカメラワークは実に繊細だから、見ごたえ十分。しかし、逆に丁寧すぎて、くどいと感じられる面も……。しかし、井浦新と永作博美の夫婦役は息もピッタリだし、演技力抜群の二人の演技は見応えがある。

ところが、続いて、中学生の片倉ひかり（蒔田彩珠）が、ハンサムな同級生からの「付き合ってください。」との申し出に応え、仲良くなった挙句、「妊娠しています。」「生理が来ていなくても妊娠することはあるんです。」と展開していくストーリーを見てみると、いい加減うんざり。今ドキこんなウブな（バカな）中学生がいるの？赤ちゃんが生まれる仕組みや避妊の知識、更にコンドームの知識くらいは、今のご時世、小学校でも教えているのでは？ひかりの母親が言い放つ、「子供が子供を生んでどうするのよ。」のセリフが、まさにピッタリ！

## ■□■中盤からバカ女が登場！物語はどんどん脇道へ！■□■

本作のストーリー展開は原作となった辻村深月の同名小説に沿っているそうだが、中盤以降、ひかりが「ベビーバトン」で知り合った若い女性（山下リオ）が登場してくるあたりから、話が完全に脇道にそれてくる。奈良育ちで、名門高校を目指していたひかりとは違って、新宿で風俗嬢をしていたこの女性は、子供の父親が誰かもわからないまま、今「ベビーバトン」で出産の準備をしているらしい。

「ベビーバトン」は個室ではなかったため、ひかりはこのバカ女と同じ部屋で生活していたから、ある意味ひかりがバカ女の影響を受けたのは当然。そして、出産後、家族との折り合いが悪くなったひかりが、浜野剛（利重剛）が営む新聞配達店の新聞配達員として働いているところに再び登場してきたバカ女が、ある日悪い連中に追い込みをかけられると、ひかりも否応なくそれに関りを持っていくことに。

## ■□■あの電話はホントにひかり？この変わり様は？■□■

「私の子供を返してください。」と電話口で迫ったのは、本当にひかり？特別養子縁組をする際、浅見立ち合いの下で、ひかりと直接面会した清和・静恵夫妻が、目の前の壊れかけた若い女性を見て、「あなたは、ひかりさんではない。」と叫んだのは当然。しかも、あの電話では、続いて「お金を払ってくれ」と脅迫まがいの発言をしていたから、その変貌は清和・静恵夫妻には最悪だった。しかして、あの話の主は、そして今日の前にいる女性は、本当にひかり？それとも・・・？

本作は、後半からなぜかドンドンそんな脇道に突っ走っていくので、アレレ、アレレ、アレレ……。14歳で子供を産んだ中盤でのひかりのバカさ加減にうんざりなら、後半

からは、「ベビーバトン」で同室だったあのバカ女のバカさ加減と、それに巻き込まれているひかりのバカさ加減が加わるので、更にうんざり。

## ■□■このラストは如何なもの？この脚本では映画賞は無理？■□■

去る10月10日に観た『異端の鳥』は、主人公の少年のホロコーストからの逃避行をテーマにした重苦しい展開が2時間半続いた後、最終章に至ってやっと再会した父親らしき男からの、「帰ろう、お母さんが待っている。」とのセリフが登場したが、その結末が、お涙頂戴方式の、近時の安っぽい邦画のような展開にならないところがミソだった。

それに対して本作では、清和・静恵夫妻が脅迫電話があったと届け出たわけではないのに、警察が清和・静恵夫妻の家を訪れるシーンが登場する。清和・静恵夫妻は、あの電話の主と直接面会し、「この女はひかりではない。」と確信したが、実は・・・？しかし、その若い女が、変わり果てたひかりだったのかどうかは、清和・静恵夫妻にとってはどうでもいいこと。再び同じ要求を持ち出されなければ、忘れてしまえばいいだけのことだ。ところが、本作ではラストに向かって、この女がひかりだったかどうかという、本来どうでもいいストーリーが展開していく。そして、それが変わり果てたひかりであったことが分かった後に、前述した『異端の鳥』とは正反対の、今ドキの安物の邦画そのものの展開になっていくので、またまた、うんざり。

ストーリー展開の合間にスクリーン上に登場する美しい風景とそのカメラワーク、そしてそれに合わせた音楽や効果音は、カンヌ国際映画祭常連の河瀬監督特有の素晴らしさだが、肝心のストーリーと脚本がこのレベルでは如何なもの……。これではいくら映画祭に出品しても、到底受賞は無理なのでは……？

2020（令和2）年10月26日記